

---

# 人文会 ニュース

---

## 業務用

### かい間見た人文書の世界

——「当世出版事情」から——

- ..... 毎日新聞編集委員 林 邦夫 1
- いま求められる出版広告の課題  
..... 「出版広告企画」代表  
元有斐閣宣伝部次長 村崎和也 7
- 人文会近況..... 人文会代表幹事  
みすず書房 相田良雄 12
- 人文会会員名簿..... 1

'83. 10 39

## 御茶の水書房

### 弔詩なき終焉

— 田口運藏伝 —

A5判 三五〇〇円

荻野正博著

### 市民社会の弁証法

シクレイダー／河村望訳

A5判・四八〇〇円

市民社会の歴史は、社会における労働が社会的束縛から、形式的自由へと移行していく歴史である。本書では原始社会と対置される市民社会の形成過程を追うとともに、その弁証法を探索する。

〒102 東京都千代田区九段北1-8-2/03(265)5746

千葉県における追悼・調査実行委員会編 定価二〇〇〇円

### いわれなく殺された人びと

— 関東大震災と朝鮮人

セルツキ一著 宮鍋ほか訳

定価三二〇〇円

**社会主義の民主的再生**  
 現存社会主義の悲劇の根源はどこにあるのか。実現可能な民主主義的社会主義のシステムモデルを具体的に提示。

東京神田 青木書店 振替東京 8-36582  
 神保町1

### マンガ文化

あらゆるジャンルのマンガをとりあげ、それらもつ魅力を明らかにしつつ、現在のマンガ文化をさまざまな角度から分析するユニークな書■十月中旬刊

### 仏教における存在と知識

仏教哲学諸派の論争、インド仏教の論理学、インド論理学の基本的性格という三論文を中心に、インド仏教の認識論・論理学を詳しく論じる■二八〇〇円

### 自然・文明・学問 科学の知と哲学の知

現代の様々な問題がもつ意味と構造を、ギリシア哲学の立場から照らし出す本書は、主に講演と対談からなり、読みやすい内容になっている■一八〇〇円

### 紀伊國屋書店

本店：東京都新宿区新宿3-17-7  
 出版部：東京都千代田区五番町12

### 大月書店

東京文京本郷2-11

# 碁の人の心

●プロ、アマ10人の人物を通じて碁の魅力を描く

永遠なる麒麟：橋本宇太郎九段の章  
 石心一路……………梶原武雄九段の章  
 草花と鋼鉄……………小川誠子四段の章  
 なせ果と白か……………古石由重の章  
 天衣無縫流……………鹿嶋一雄の章  
 能ある鷹の爪……………大岡昇平の章  
 素人の極意……………黒田了一の章  
 空想とともに科学……………安野光雅の章  
 自然のほどあい……………山本 圭の章  
 プロとアマの接点……………菊池康郎の章

右遠俊郎著  
 46判・1300円

# かい間見た人文書の世界

——「当世出版事情」から——

毎日新聞編集委員 林 邦 夫

人文書出版の晶文社で本の題名や部数、定価などを最終的に決めるスタッフ会議が開かれるのは毎月第二、第四木曜日の夜である。

昼の仕事が一段落する六時ごろ社長 中村勝哉、編集長津野海太郎、営業部長萬洲隆男、制作部長伊勢起世夫らのスタッフが相次いで二階の企画室に姿を現す。

企画室といっても、そんな結構な部屋が特別にあるわけではない。中村のデスクが置かれ、ふだん「経理の部屋」と呼ばれている狭い一室の一隅にあるデコラ張りの机といくつかのイスの占める空間が、この時だけ臨時に早変わりするのだ。この机をはさんで「そんなに売れる当てはないだろう」「この本は出

すことに意義がある」「その著者では知名度の点がね」など、時には荒々しいほどのやり取りも含めて熱っぽい論議が何時間も続いて「最終決断」が下される。出版社としての意思決定の瞬間である。

そのスタッフ会議に頼み込んで同席させて貰った。部数や定価など企業秘密に属する内容も多い会議だけに、晶文社でも外部の人間を入れたのが初めてなら、本や出版の世界の取材経験の長い私にとっても、こんなところにまで入るのは初めてである。

六月第一回のスタッフ会議は八日に行なわれた。中村が翌日中国へ旅立つため一日繰り上げた。津野が企画書をかかえてやってき

た。机と壁とのわずかの空間に大きなからだを押し込む。窓際である。津野の真向かい、ストープを背にしたイスが中村の定席である。津野が坐っている場所はかつては編集担当役員であり英文学者としても知られた小野二郎がいた席だ。中村と二人で晶文社をつくった小野が急死して一年半になる。

小野をしのんだ追悼文集『大きな顔——小野二郎の人と仕事』（晶文社・非売品）の中に津野が編集者としての小野を描きながらスタッフ会議の模様をこう伝えている。「私たちがプランをだすと——そこにはもちろん島崎勉、原浩子、村上鏡子、秋吉信夫など、若い編集部員たちの企画案もふくまれるのだが

——中村さんが内容のたしかさや売れゆきの見とおしなどについて、ひとつひとつ、たんに問いただしてゆく。それが私たちの会議のいつもの順序だった。企画室のうちで社長のかれだけは、なにも予備知識をもたないまっさらな読者の立場をまもるというテーマになっていて、提案者はこの恐るべき読者一般にむかって自分の企画を噛んでふくめるように説明し、あわせて他のメンバーをうまく説得しておかねばならないのである」。

八日の会議の中心議題の一つは七月十五日に刊行の『カラワン楽団の冒険』だった。津野が編集部でつくった企画案のコピーを片手に説明する。「カラワン楽団というのはヒット曲『人と水牛』で日本でも知られているタイ随一の人気バンド。タイのポップ・デザイン、タイのビートルズといってもいい。若者や学生の人気を集めたが、そのあまりの人気と激しい歌詞のため右翼や軍部に狙われコンサートに銃弾を撃ち込まれたこともある。一九七六年の流血クーデターで解放区にのがれ、四人のメンバーは散りぢりに中国大陸まで放浪の旅を続けた。一昨年、バンコクで再会、再びカラワンを組織した。そのメンバーの一

人が書いた臨場感あふれる回想記だ。カラワンはキャラバンの意味。音楽ファンもアジアに関心のある人もぜひ読んでほしい本だ」。

中村を中心に執拗な質問が続く。「音楽とアジアのどちらに重点を置いて読者を考えているのか」「日本ではテーマだけしか発売されていないそうだが、知名度で落ちるね」「テーマとしていまの日本では距離感があるのでは」。そのたびに津野ががんばる。「距離感があると思われるだけ、逆に日本がぐうたらになっている。この本を出す意味はそれだからこそ大きい」。

「ほかの社での類書は、売れ行きは」と中村。萬洲が発言する。「S社で初版三千部で在庫千部くらい」「最高で二千部だな」とつぶやく中村に、「こんな本だからこそ部数を多くして少しでも定価を下げて出すべきだ」と津野が迫る。やっと結論が出た。「二千五百部。定価は千五百円」——ただし九月に楽団が来日したとき公演会場での売り込みに力をそそぐことという付帯条件付きだ。「それで原価率は？」。伊勢が答えてこの夜の会議は終わった。

ただ『カラワン楽団の冒険』という題名を

編集部でもう一度検討してみることにした。一週間後、いったんは『生きるための歌——カラワン楽団の冒険』と決まった。が、再びもとに戻った。七月十五日に書店の店頭ならんだ本は『カラワン楽団の冒険——生きるための歌』。『ぎいてくれ、友だち、タ』の若者の歌を」と書かれた帯がかけられていた。この本がどれだけ読者にアピールしたか、結果は聞いていない。が、スタッフ会議の終わりがけに中村が「こんなふうにして部数が増えると在庫も増える。つらいね」と苦笑いしていた顔が忘れられない。

こんなスタッフ会議にまで押しかけたのは実は五月九日から七月三十一日まで七十回にわたって毎日新聞の夕刊一面（夕刊のない地域は翌日朝刊社会面）に連載した「当世出版事情」の取材のためである。すっかり変わった読書世界の現在をドキュメントタッチで追ったこの連載はベストセラーから女性誌創刊ブーム、巨大出版社、地方出版……などさまざまな出版界の現実をとらえた。が、その中でとくに力を入れた部分に人文書、教養書を

出している硬派出版社の問題があった。晶文社の取材はその一環だった。いままで紹介してきた内容はコンパクトな形で六月十六日、十七日の紙面に載ったが、読者の反響が予想外に多くびっくりした。

「部数や定価はあんなふうにして決めるのですか。初めて知りました」という素朴な感想。「会議の熱気が伝わってくるようでした」といった電話など普通の読者の反響はまだ予測できた。意外だったのは出版界内部での感想だった。「あれを読んで恥ずかしく思っています。うちなどとてもああは行かない。なあなあで決めることが多くて……」といった話をいくつも聞かされた。「おたがいによくわかっているようで、ほかの出版社のことは案外知らないのです。『当世出版事情』で初めて教えられることもたくさんあります」とうれしいことをいってくれた人もいた。この原稿で晶文社のスタッフ会議にかなりのスペースを当てたのも、そのやり取りの中からいまの人文書を出している出版社の問題がさまざまに浮かび上がってくるからである。

準備期間も含めて半年近く、たくさんの出

版社を回った。何度も取材し直したところもあるし、よく実情を知っている社にも改めて確認の取材をした。同時進行的なスタイルをとったため、どこの出版社でもその時期のベストセラーとか話題の本が話の中に出てくるが多かった。もっとも多く出たのは岩波書店が刊行したばかりの『これからどうなる——日本・世界・世紀』のことだった。

各分野の四百四十六人がアンケートに答え核戦争の行方からコンピュータ革命・遺伝子工学の未来、家族や教育の今後、ミステリーやプロ野球、プロレスの未来まで語る『未来情報集』ともいえる大部の一冊だ。タイトルの直截さ、ペーパーバック、安野光雅の描くファンタスティックな表紙、内容もテーマ別ではなく執筆者の五十音順、発言内容は核もコンピュータもミステリーも分けへだてなく一人千二百字分。そして赤川次郎、ジャイアント馬場、小林亜星、三遊亭円楽……といった岩波とはなじみの薄い登場人物の目立つ一面で、岩波らしい人々の名前の欠落——国電や地下鉄での中吊りまで出てよけいに話題になった。

専門書や教養書をつくっている出版社にと

っては問題の一冊だった。しかも、それが売れている。話題のテーマに出てくるのは当然である。正直いって評価は真つ二つに割れていた。「あんなもの出してはだめです。岩波書店がつくる本は『これからどうなる』でなく、たとえば『世界平和はこうなる』核戦争の行方はこうなる」といった一つのイメージを持ったものでなければ」とある硬派出版社のベテラン編集者。「新しい読者がつかかも知れないが、今までのイメージがあの本のためにどれだけダウンするか、あんなタイプの本は新聞社の出版局などでやるのがいいんです。私が社長なら出さない」と戦前派編集者がいう。一般的に年配の人には拒絶反応が強い。

「あの本をつくった編集者はよく知っていますし、いまの状況の中では私は認めていいと思います」というのは、問題意識を持った本の出版で知られたある編集長。「編集部でどう思うかみんなの意見を聞いてみました。ちょうど半々でしたね」と専門書出版社編集長。「自分のところで出版ということになると二の足をふみますね。でも、便利な本であることは確かです。案外、編集者や新聞記者

がいちばん買っているんじゃないですかね」という声もあった。

岩波書店内部でも『これからどうなる』について意見は二分しているようだ。「岩波らしくないといわれますが、むしろ岩波らしい本と思います。いままで築きあげてきた人間関係を生かした企画です」というのは編集担当の岩崎勝海。社長緑川亨は「確かに異質、いや異色だと思います。しかし、いろんな人の二十一世紀への未来図を断面的に取り上げ新しい世紀への展望のための情報としてできるだけ多くの人に読んでもらう。そのためにもいままでの枠組みを拡大して広い層に……と企画したからです」とこの本が岩波書店の創業70周年記念出版であり、読者サービスの本であることを力説する。「岩波の本が全部こんなつくりになるのでは決してありません」といい切る。「これからどうなる」はベストセラーにも顔を出し企画としては営業的にも成功した。緑川はこれに関連して「読者をいかに増やすか」の方法を語った。一つは「積み上げ方式」ともいえるもの。岩波の本になじむ読者を見直すと岩波新書、岩波文庫などを通じ少しずつでも積み上げるやり方。もう

一つはいつきよに読者層を広げるやり方だ。機動性を持つ岩波ブックレットなどがそれだし『これからどうなる』もその延長線上と考えている。いい本は黙っていても売れるとそうぶいていられる時代ではないのである。

新しい読者層を各社はどう考えているのか——今年、倒産らしい初めて新入社員(三人)を採った筑摩書房。編集部長の中島岑夫は「筑摩のような出版社にとってはかつては大学生は出版物の目安になる『定点観測船』みたいなものだった。しかし、いまや大学生は単なる若い世代に過ぎない。いろんな本はまず三十歳前後のビジネスマンに読まれ、それから学生層にもやはり出す。当然、サラリーマンを狙った企画も多くなります。ポラードにはポラードの精神があるように筑摩の持つ精神は放棄しません。が、伝統の品、名品ばかりでなく女性客が買ってくれる日用品なども置かねば……」という。確かに「大卒を卒業した。さあ、本を読もう」などといわれる時代である。今春、第一期がはじまった「ちくまセミナー」などまさにサラリーマ

ンを意識したシリーズである。

二年前、経営危機に陥り、文化人が「応援声明」まで出した平凡社。人員整理、本社ビル売却、賃金カットのあと、今春の女性誌「フリー」の創刊で話題になった。編集局長小林祥一郎の口ぐせは「思いは高く腰は低く」である。「今までの平凡社は女性よりも男性、感覚よりも知識、現代よりも歴史——二分法でいえば後者の方に傾きすぎたと思います。今後は残った対極の方にも力点を移して……」ともいう。百人一首や源氏物語などを絵と現代語訳でビジュアルに読ませたり、研究書的な「中世もの」にイラストを多用して本の持つ雰囲気をやわらげたりする努力はこの路線である。百科事典のメンバーが専門分野で単行本づくりを手がけ出したのも「危機」らしいことだ。

サルトルで有名な京都の人文書院。かつてのように翻訳ものだけではやっていけないと女性ものを中心に家庭・教育の分野への目配りや古代史、東洋思想などへの志向もみせはじめている。「以前は毎年百五、六十点は再版していたのですが、昨年は半分に減りました。本の生命も短くなりました」と社長渡辺

陸久。

どこでもサラリーマン路線とか女性路線への志向が目立つようだ。が、本当にそれだけでいいのだろうか。改めて編集者のあり方も問われてくる。かつては編集者は著者と読者の間で裏方的に手助けする存在でよかった。編集者抜きで著者と読者の対話が成立した。著者の権威がそれを可能にした。が、今日では権威はなくなり、この不透明な社会の中でかつての問題のとらえ方は効力を失った。今こそ編集者は読者が何を望んでいるかすばやく見抜き、的確な著者との関係プレーで「おもしろい本」をつくりだすプロデューサー的役割を果たすべきなのだろう。

筑摩書房の中島岑夫はいう。「確かに今は編集者にとって非常につらい時期です。でも逆にいえばこれほどやりがいのある時はないのかも知れません」。雑誌編集者のアイデアである小学館の『日本国憲法』、残間里江子の『蒼い時』……ジャンルこそ違えその例はたくさんある。

よく「活字離れ」という言葉が不振の理由として使われる。われわれも安易に使いがちだ。が、その内容をきちんと定義しようとする

ると大変むずかしい。日本出版労働組合連合会の「出版レポート」は「82年」「83年」の二年続けて「活字離れ」を問題にしている。そして「活字離れ」の定義付けとして「(1)テレビの普及、あるいはその影響による映像文化への「移行」、傾向(2)コミックやビジュアルな雑誌の全盛と、活字主体の人文・社会科学系出版物の不振(3)「硬派」出版社の経営不振と大手寡占化傾向、総じて出版界の先行きの見通しの暗さ——の三つの複合イメージがその内容とする。

そしてこの現象は十六歳から十九歳の若者の書籍離れで顕著に表れるが「マクロの動態としての全体の活字離れ、書物離れ傾向はない」とさえ結論づけた。また、今の若者がメディアとの多様な付き合いのなかでたくみに棲み分けていることを浮き彫りにする。「今の若者は、テレビ、ラジオ、情報誌、マンガそして、活字主体の書物の、それぞれのメディアとしての特性を十分わきままえながらそれを使い分けている。いわゆる書物に期待するものも、旧世代のそれと違って変わっていないし、自分の読書量の不足を十分に認識もしている」とまとめられている。

全国大学生協連合会の「学生の消費生活に関する実態調査」(82年10月)にもおもしろいデータがある。「あなた自身は「活字離れ」か」に肯定的な答えが五一・四%、残り「そんなことはない」「いちがいにいいない」。そして「あなたの読書時間は大学生の読書時間として十分か」の問いには「少し不足気味」「不足している」が合わせて八一・六%という数字だ。期待していい回答だ。

日本経済新聞社が行なった「マーケティングデータ」書店編(83年6月)をのぞくと「書店が本を取り扱う時重視する版元の企業特性」としては「企画・編集内容がよい」七〇・五%、「読者の動きをつかんでいる」六六・五%、「企業PR・発売広告がうまい」六三・〇%、「良心的出版活動を続けている」五一・七%……という数字もある。

確かに今は硬い本は受け入れられにくい状況にあるし、禁欲的に少数数出版にならざるを得ないが、いい本だから売れないのは当然と思ってしまうわけで、いろんなデータが示してくれる可能性へ「編集者のやりがい」をぶっつけることがいちばん大切なだろう。

そのあたりを力をこめて語るのは理論社会

長小宮山量平である。小宮山がよくいうのはイギリスのアンウィン社の先代社長スタンリー・アンウィンの著書からの「創意と冒険」という言葉だ。この言葉を使いながら小宮山は説く。「戦後出版界の激流にもまれつつけてきた経営者たちの多くは、アツモノにこりてナマスを吹くように堅実第一の経験主義のとりこになりがちだ」(「出版クラブ会報」二二〇号)。創意と冒険を恐れるな。臆面なく若者たちに呼びかける冒険が出版のあすを招くというのだ。

だから、小宮山は未来社社長西谷能雄の「ころざしの業としての出版」にはいささか異論を立てる。小宮山が評価するのは角川書店社長角川春樹のチャレンジ精神だ。第一に角川源義先代社長の御曹司でありながら二代目一般の経験主義に落ちることなくそのカベを破った。第二に「創意と冒険」を忠実に実行している。第三に時代の文化状況に旺盛にチャレンジしている(「シネ・フロント」83年7月号)——がその評価という。このことは十分に考えていいことだろう。みんなが角川になる必要はない。問題はそれぞれの「創意と冒険」にあるのだから。

その小宮山はこの春、東京の日本エディタースタールの入学式で出版人を志す若者たちを前に話した。「ワープロによる現代のダイナミックな文脈誕生の可能性」「サブカルチャー時代の内奥からのエネルギーの取り出し」「近代的教養主義の行き詰まりのなかでの新しい啓蒙」の三つの柱を中心に、こんな時代こそ「思いがけない文化的高揚をひそめた高潮の訪れが望見できるかも知れない」と新人たちを励ました。その底流にある認識は現在のすさまじいまでの技術革新の問題、巨大な量の俗流出版物を呑みくだしている大衆化社会の問題、そして過去一世紀の出版文化の流れをつくってきた近代教養主義の行き詰まりである。

これらの問題は何も出版人ばかりではなく現代を生きる日本人一人々々が負わされている課題であろう。これとどう切り結び新しい地平を開いて行くか——逆にいえば人文系出版社が生きていくところでもあるはずだ。そこを大事に考えたいものだ。「当世出版事情」の取材を通じて多くの出版社に迷惑をかけ、無理も聞いて貰った。会社更生法により再建中の出版社に「それだけ

はどうもかんべんして下さい」と断わられた取材もあったが、全般的に各社とも非常に協力的だった。ことに大手出版社と違い人文系出版社では経営規模が大きくないだけに「肉声での取材」が可能だったのがとてもうれしかった。どこも大部数の雑誌とか大文庫はなく、その代わりに「ひとつかま」の雰囲気があった。出版の原点というものはこんなところにあるのだろうと思った。教えられたことも多かった。

ただ、どこでも状況のなかで、とにかく「しのぐ」姿勢だけが目立ちすぎたのが口惜しかった。雑誌とか低価格のエンターテインメント本に負けない心意気が欲しかった。やはり「創意と冒険」である。

ニューメディアの話題がかしましい。本の制作過程などで影響は大きいだろうが活字文化そのものがそれによってダメージを受け、消滅することはない。むしろ「本こそハードもソフトも兼ね備えた便利で安いメディア」であることが改めて確認されている。本の未来はまだまだ続く。人文書の特つ役割はますます大きいはずだ。

|| 敬称略 ||

# いま求められる出版広告の課題

「出版広告企画」代表  
元有斐閣宣伝部次長

村崎 和也

新しい雑誌が相次いで創刊されている。今年上半年だけでも一二四誌が創刊されているという。先頃の新しい四つの女性雑誌の創刊時には、新聞・テレビなどマス媒体での広告が賑々しく展開された。それぞれが数億円を投じてのキャンペーンである。書店の店頭も

たくさんの雑誌が華やかに山積みされるようになってきている。地味な版元にとっては、なにか別の世界を見るような感すらある。

出版広告の今日、そして明日を考えると、いうテーマに従えば、このように競争時代を迎えた雑誌のシェア争いにどうやって勝ち抜くかという、マス媒体の活用を中心とする広告

のためのテクニクを探る、ということが最大の課題であるかもしれない。しかし、ここでは、あえて影の薄くなりがちな、地味な書籍の広告をどうとらえるのかという点について考えてみようかと思う。

映像化時代といわれる今日、とくに若者を中心とした読者のニーズが、視角的・感覚的な面に重点をおいた雑誌にあるというのは、自然のなりゆきではあるが、一面、雑誌ブームというのは、出版社自身がつくり出しているという点も見逃せない。このことは、ことに広告の面から明らかである。

新聞広告についていうと、朝日・毎日・読

売の三紙での出版広告の総体量は、五年前とくらべて一三パーセント強増えているが、この間の広告料金の上昇率と出版界の売上上げの伸び率とのギャップを考えると、増えているのが不思議なくらい。しかし、そこで扱われた商品を書籍と雑誌とにわけると、雑誌に使われたスペースは三〇パーセント増えているのに対して、書籍に使われたスペースは数パーセントではあるが減っている。その結果、五年前の広告全体量に対する書籍五一パーセント、雑誌四九パーセントという占有の比率は、書籍四四パーセント、雑誌五六パーセントと逆転している。同じ広告の機会をど

う使うかというとき、売れそうなものを扱うのは当然といえるが、雑誌のほう売れるからということから、雑誌を扱った広告が増えていることが、より一層読者を雑誌のほうにひきつけることにつながっていると思う。

新聞広告の面でこのような傾向が強まっている一方で、書籍の発行点数は、なお増えつづけていることを考えると、書籍を求めている読者に対しては、ますます情報提供がおろそか、不親切になってきていくのは必然であるから書籍の売上げが落ちていくのは必然であるとさえいえるのである。

新聞広告の中で最低のスペースである「サシヤツ」ですら百万円に近い金額では、規模の小さい出版社にとっては容易なことではないし、マス媒体での大手寡占化の傾向はますます大きくなっていくのではないかとはいっても全国紙の広告料金は、部数が多いから一部当りの単価という点では他の広告手段による場合とくらべてはるかに安いけれど、なおその絶対額は、少数数の出版物をつくっている版元にとっては、見合った数字になりにくく、ときには、到底ペイしないことがわかっている場合さえある。

いわゆる硬派の書籍の版元の本の新刊部数というのが二、三千部、せいぜい五千部、それを七五〇万部とか九〇〇万部という量を誇るマス媒体に広告することの矛盾を考えてはどうか。七五〇万部の新聞に三千部の本の広告をすることは、七四九万七千部分のムダな広告料を使っていることだといういい方ができるわけで、その効率の悪さはかなりのものである。マス媒体による広告が、直接の販売収益を得るためばかりでなく、版元の知名度を高めるために役立つという面があるから、という点があるが、版元イメージというものも、はたして実際に売上げに結びついていくのか、とか、いったいどの程度の量を使えばその効果があがるのかといった点になると、それはそれなりに難しい問題である。

広告料とのからみで効率のよさを求めるならば、一点一点の本の的中味に沿って、的確に選別されたターゲットに向けての、それぞれの本にマッチしたミニ媒体を探ることが大切である。たしかに、現実にはいろんな本に共通する代表的なミニ媒体は不在であるけれど、専門的な雑誌などを中心とする一点ごとのキメの細かい使い方の工夫は、案外おろそ

かであるように見受ける。また、書店においての扱われ方にいろいろの問題を残したまま放置されている内容見本などについての工夫も不十分だし、書籍協会の「これから出る本」や梓会の「出版ダイジェスト」など何社か共同での販促材料への真剣な肩入れも欠けている。これらを面倒がらずに考えて改善するなど、マス媒体からミニ媒体への合理的な転進は緊急の課題ではないかと思う。

それにしても、高い広告料を払っての新聞広告であるのに、とくに最近の書籍の広告のつくり方が全体的に粗雑になっているように感じる。少数数の本を広告するにしては負担の大きい広告料を払うのだから、表現の面で最大限の努力と工夫をして、よい広告づくりを心がけなくてはならないと思うのに、広告された商品の魅力を感じさせないどころか、コピーを読んでも内容がわからない広告が多くなってきている。

新聞広告に限らず、雑誌広告、さらに内容見本、チラシやDM材料など全体について、広告としてそれぞれ最大の効果をあげるための制作上の工夫がもっとあるべきではないかと思う。商品の内容を十分に吟味した上で、

与えられた広告のスペースの隅々まで細かい  
気配りが欲しいものである。

広告づくりの上での複雑さ以前の問題として、  
広告計画のズサンさや管理上のいい加減さ  
もないとはいえない。計画らしいものすら  
なく、その場その場での思いつきの広告を  
している版元が存在する。その根底には、  
広告するにはお金がかかる、それでいて、  
広告による効果や期待がはつきり把握で  
きていないで、まあ多少はやってみようとい  
った考えがあるように見受けられる。広告料とい  
うのは安ければいいというものではなく、広  
告費として投下されたものによって、もたら  
される利益との相対関係が重要であるという  
認識に立って、その効率を主眼においた綿密  
な計画を常に立てていきたいものである。

売上げが低迷していると、経費削減の一環  
として広告費を削るといふ発想が容易に出て  
きそうであるが、広告費を他の諸経費と同様  
に考えることには問題がある。経費というの  
は過去の消費に対する資本的支出であるが、  
広告費は、将来の効果を求めるために前払い  
される収益的支出である。当然のことなが  
ら、広告費の配分、計画には十分意を用い、

効率のよい広告を考えるとすることは重要な  
ことであるが、広告費の絶対額を単に削減す  
ることは大変危険で、売上げの低下にむしろ  
拍車をかけることにつながる。あるアメリカ  
の広告会社の社長の研究によると、景気低滞  
期に広告費を削減すると売上げ高に悪い影響  
があるが、反対に景気低滞期に積極策をとる  
と景気回復期にハズミがついて売上げの回復  
力を早めるとして、広告費削減の影響は長期  
的には離れていった顧客の引戻しに数倍の投  
資が必要になると結論づけている。

少数数の書籍が、どういふふうにも市場に出  
され、書店でどう扱われているのかというこ  
とを考えた上で広告を考えなければ、効果を  
あげることが期待できない。わずかに数千部の  
本の場合は、大型店、中型店を中心に数百店  
くらいの書店に配本され、一店当りの場合は  
十部以上配本されるところはごく限られるで  
あろう。一日平均百点近い書籍ができてい  
ることと考え合わせると、個々の書店での硬派  
の書籍の扱われ方については、あまり想像し  
たくない。どこの書店でも、入口近辺にはお  
びただし難誌が並べられ、それに文庫の棚  
がつづく。大型店の場合は、このほかに新刊

の平積み台があるが、ほんの数千部の本は、  
あまり人が入ってこない奥のほうに、ひっそ  
り背中を見せているだけ。それも背を見せて  
いられれば、いつか、その本に興味をもった  
人との出会いが望めるが、そういつまでも安  
住させてもらっているわけにいかない。書店  
の店頭での問題は多いが、紙数の都合もある  
のであまりくわしくは述べられない。ただ、  
広告を考える場合、実際に商品が読者の手に  
渡る場所のことを考えないでは、話にならな  
いのである。多くの版元の場合、販売と広告  
がつながりをもたず、それぞれが勝手に動  
いているきらいがないでもない。少数数の本  
の場合、だれもが買うというものではない反  
面、その本とそれを求めている人との出会い  
の場をつくってやる必要がある。ここに細心  
の改善を求めていかないと、少数数書籍出版  
の基盤は崩れてしまう。少なくとも、現状で  
は広告のタイミミングをうまく合わせること、  
などをもっと細かく配慮すべきである。将来  
的には店頭での展示の方法、棚構成のあり方  
自体に改善を加えることも重大な課題であ  
る。

寺林修著『出版流通改善試論』という本の

なかでの読書層の分類のしかたがなかなかおもしろい。教育評価基準の曲線を用いて、(1) 評価1及び2(三一パーセント) 読書と無縁の人、(2) 評価3(三八パーセント) 一般雑誌・コミック・一般文芸書・ベストセラーものの読者、(3) 評価4(二四パーセント) 少し専門的分野まで入っている読者、(4) 評価5(七パーセント) 専門的書物や特殊な分野の読者の読者、とわけている。そして、大部分の書店は(2)の読書層にのみ対応できるような品揃えになっており、一般大型店でも(3)の読者層までが限度で(4)の七パーセントの読者層に対して対応のしかたが冷淡であるといっている。そして、現在の読者が真に欲しているのは、自分の欲する分野に関する「より個性化・専門化された書店」の出現ではないかとし、現今の情報流通は最大不特定多数にむかつてなされており、そのフィードバック機能はきわめて弱い、もし、版元が書店を、書店が版元をそれぞれ意識的に選択し、そうすることにによって書店間での個性化・専門化が発揮できれば、として、それによって現今の情報流通はさらに密度の高いものとなろう、たとえ中小の版元の出版物といえども質の高い

商品ならば必ず活路があるはず、といっている。書店そのものの画一的パターンの店構成のままでは、どうにも手のつけようがないけれども、広告の立場からだけでも、本と読者の「出会いの場」づくりをするための道を探っているといきたいものである。

話は最初に戻るが、雑誌ブームというなかで、とくによく売れている雑誌の場合、もちろんマス媒体を使っている広告攻勢によるところも大きいものの、テレビがらみとか、コミによる影響もかなりあるようである。

書籍の場合も同様で、最近のベストセラーは、ほとんどテレビ、もしくはテレビタレントがらみのものが多くなっているし、ある銀行の業界動向調査のなかでは、最近の出版業界は映像文化の普及と密接な関係を保つことによって発展しつつあるとさえいっている。テレビがらみはともかく、仲間のあいだで話題になっているから、という動機で本を買う人もかなりいる。とくに若い人にそういう傾向が強い。硬派の本の場合でも、ロコミによって買われている度合はかなり多いように思う。店頭の様子が状況であるだけに、現物と出会える機会がきわめて薄くなっているだけ

に、私などでもだれかに聞いてそれで買うという場合が増えた。通常の広告への期待があまり持たず、店頭状況もままならないという感がこれからも増していくだろうだけに、ロコミをどうやってつくり出すかという課題にアプローチしていくことも重要ではないかと思う。

活字離れとか読書離れだとかいうことをよく聞くようになってから数年を経過した。たしかに毎日新聞社の読書世論調査などを見ると、書籍の読書率が、ことに二十歳代を中心にならり下がっているし、読書への意欲そのものの低下が顕著であることがうかがえる。暇がない、目が疲れる、テレビのほうがおもしろい、といった理由が上位を占めているが、管理・専門職などでの「読みたい本がない」とか、学生などでの「どれがよい本かわからない」などといった理由に注目すべきである。また学生を対象とした昭和五四年の同社の読書調査のまとめによると、十五年前とくらべて「この一カ月に本を全く読まなかった」中学生が一・五パーセントから三八・五パーセントに、高校生が一・二・〇パーセントから四七・九パーセントへと大幅に増えて

いる。昭和五四年における高校三年生といえ  
ば昭和三六年生まれ、いま、この人たちがお  
となの世界へ出てきはじめてたわけだが、昭和  
三六年というのは、テレビの世帯普及率が九  
〇パーセント台に達した年で、生まれてから  
ずっと映像と音声の環境に浸ってきた世代で  
あるから、一カ月の読書平均冊数も、書籍一  
・一冊に対して雑誌一一・四冊と、見る本へ  
の接触度が断然強いこともうなずける。

『広辞苑』によれば「本」というのは「人  
の思想を文字・絵画などに記し、これを後に  
遺し他に伝えるもの」となっているが、今日  
の「本」は、むしろこうした定義から離れた  
もののほうが売れるのではないかという気が  
する。しかし、一方では元編集者の粕谷氏な  
どは「知的要求は高まっているし、書籍の環

境は悪くない」はず、活字離れはむしろ出版  
社がつくっているのだといっている。「おと  
なになりきれない青年が多く、三十歳台まで  
マンガを読むようになってきているが、映像や音  
声とともに活字もこれらに劣らぬ感動を与え  
るもの」ということを、出版社が「アピール  
する努力を怠って」「セックスなど程度の低い  
ところに調子を合わせようとしていることに  
問題があると指摘している。

このような背景の中で、本を読む人、読ま  
ぬ人それぞれをどうとらえるか、あるいは書  
店へ行く人、行かぬ人、行っても奥へは行か  
ぬ人など……行かぬ人を書店へ行かせるには  
どうしたらよいか、そして奥までどのように  
導入するかも考えなければならぬが、とり  
あえずは、むしろ、本を読む人を読まぬ人に

してしまわないようにつなぎとめることが急  
務ではなからうか。書籍に関する情報伝達率  
の低下がこのまま進めば大変なことになって  
しまうのではないかと思われるのである。  
厳しい経営環境の中でより一層綿密な広告  
計画をもとに、効率のよい広告をめざして、  
基本に立返った出版広告づくりが望まれる。  
どんなにいい本であっても、その本が出来た  
だけでは意味がない。本の一冊一冊が、それ  
ぞれの本との出会いを求めている読者の手に  
渡ってこそ、はじめてその本の存在が完成さ  
れるのである。その点で、版元は目先の経費  
削減にこだわるばかりでなく、広告に課せら  
れた使命について、この際、より一層強い認  
識をもつべきではなからうか。

## 第一線の新聞記者がドキュメントタッチで綴るユニークな発掘物語

# 日本の遺跡発掘物語

森浩一企画・監修

●全10巻・四六判  
●予価各一三〇〇円

第一回本  
11月下旬刊行

### ① 旧石器時代 ② 縄文時代

代表的な遺跡について、発掘前史、発掘作業・  
経過、学問的評価にふれ、発見者や発掘者の  
人生にも光をあてる。 予価・各一三〇〇円

- ③ 弥生時代Ⅰ(東日本)
- ④ 弥生時代Ⅱ(西日本)
- ⑤ 古墳時代Ⅰ(東日本)
- ⑥ 古墳時代Ⅱ(近畿)
- ⑦ 古墳時代Ⅲ(西日本)
- ⑧ 歴史時代Ⅰ(東日本)
- ⑨ 歴史時代Ⅱ(近畿)
- ⑩ 歴史時代Ⅲ(西日本)

## 社会思想社

東京都文京区本郷1-25-21  
電話 東京 03(813)8105

## 人文会近況

みすず書房 相田良雄

小会は創立十六年をむかえました。そこで現在までの活動と、今後の課題について、少し申し述べたいと存じます。

### 現在までの活動

人文会は昭和四十三年に創立しましたが、当時人文書は書店の店頭で分類もなく文芸書の隣に展示されているのが実状でありました。

私はこれでは、読者にアピールすることむづかしく、結果として売行きが落ちるのではないかと、人文書の将来に危惧をおぼえたものでした。

一社では出来ないことでも、教社が集まればと人文会を作り、書店店頭に人文書の棚を確保し、かつ分類展示をして頂こうと考えた次第であります。

そこでPRを兼ねて、人文書の売行良好書のセットをつくり、店頭展示をお願い致しました。次に読者への宣伝と、書店の皆様が分類展示し易いように「人文図書総目録」をつ

くり、配布してまいりました。

弘報では、「朝日ジャーナル」の共同広告、「出版ダイジェスト」による広告、「人文図書の新刊案内」「人文会ニュース」の作成など普及の面でもいろいろと実施してまいりました。

たまたま時流のつって人文図書の売行きが良かったことと、書店の売場拡大の時期とも重なって、今日、人文図書の棚を店頭に定着して下さる書店様がふえてまいりました。

しかし、石油ショックのための価格の高騰と、減税が五年もなかったことによる可処分所得の減少によるなど、読者の価値感が変貌し、書籍の買われ方をかえたため、人文書の売行きが落ちてまいりました。

最近では雑誌売場がふえ、専門書の棚がへり、売行低下にさらに拍車がかかるかも知れない状況になってまいりました。しかし果してこの状況が長続きするのでしょうか。

小社のデータでは、売行き上位の百書店の占有率が年々上がってきております。

これらの書店は、たとえ回転が少々悪くても専門書を展示するべく使命感をもって努力されております。これらの努力は必ずや報われる時期がまいると私は信じております。

### 現状

現在、人文会は販売・弘報・調査企画の三委員会からなり、毎月一回各委員会を開いて種々の施策をねっております。その案を毎月の例会において全員に提示し、出来ることから一つ一つ実行にうつしております。会員は、創立当時から年輩者は三名に減りましたが、幸いに若い有能な会員から、種々の提案がなされております。

### 今後の課題

これだけ人文書の販売が厳しくなった昨今、それに見あった販売政策をとらなければならぬと存じます。

それには特約店政策の強化が一番望まれるのではないのでしょうか。現在、一所懸命に人文書を販売して下さる書店様に対し、今まで以上に販売し易い状況を早くつくらねばならないと愚考しております。

そのため会員の衆知を集め、一つずつ実行して、特約店様の期待にそうべく努力したいと存じております。

書店様におかれても、会への要望、苦言をどんどんお与え下さり、共に人文分野の書籍の販売にご協力下さるようお願い申し上げます。

## △野球速報▽

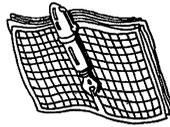
強豪・八重洲BCに完封勝ち！

時折雨の降る去る七月十日の悪コンディションの中、人文会チームと八重洲ブックセンターチームの熱戦が行なわれました。一勝一敗の後を受けた事実上の決着戦、八重洲チームはエース荻野、人文は意表をつく曲球の持ち主、軟投市川の先発でプレーボール。

人文は豪腕の前に三振の山また山、しかし曲球投手もヨタヨタと要所を締める投手戦、誰もが前回同様に人文の完封負けを予想し、選手も試合後のビールの味だけを楽しみに、監督の号令に右往左往。

しかし勝負は時の運、強いチームが勝利するばかりでないのが楽しさ、やめられなさ。上手の手から水が漏れるが如く、人文はエラーから一挙五点を獲得、八重洲チームは驚きとショックから立ち直れずそのままゲームセットとなり、試合後も信じられない様子でした。気を良くした人文会チーム、その後発行の新聞はグリーンヒットの連続といったかどうか、八重洲ブックセンターさんどうも有り難とうございました。

(菊池記)



## 後記

前半の冷夏から一転して、うだるような猛暑にみまわれた今年の夏もおわり、なかなか一筋縄ではいかない時代の「読書の秋」をまたむかえることとなりました。

人文会ニュース39号は真夏に編集されたこともありまして久々の「うすもの」、スリムな姿で登場いたしました。

今号では企画を生み出す側の苦悩とその実際を林邦夫氏に、また少部数の専門書版元の宣伝広告の現状とあり方について村崎和也氏にお願いしました。お二人ともご多忙のなかご快諾いただきました。うすものながらよみやすく中身の濃い号に仕上がったと思っております。

※ 36号から3回にわたって連載いたしました人文書講座は今回はお休みさせていただきました。次号をおたのしみにお待ち下さい。

※ 九月より福村出版が当分の間休会することとなりました。これにともない日本評論社が福村出版にかわり幹事社をつとめることとなりました。どうぞよろしくお願いいたします。

弘報委員会

# 人文会會員名簿

(113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

58. 10. 15現在

|      | 社名      | 担当者   | ☎番号 | 所在地                  | 電話                |
|------|---------|-------|-----|----------------------|-------------------|
| 幹事   | 青木書店    | 山根 襄  | 101 | 千代田区神田神保町1-60        | 292-0481          |
|      | 大月書店    | 原田 敦雄 | 113 | 文京区本郷2-11-9          | 813-4651          |
|      | 御茶の水書房  | 和田 充博 | 102 | 千代田区九段北 1-8-2        | 230-2510          |
|      | 紀伊國屋書店  | 佐久間健雄 | 102 | 千代田区五番町12<br>Fミール五番町 | 263-9006          |
|      | 勁草書房    | 氏家 富男 | 112 | 文京区後楽2-23-15         | 814-6861          |
| 休会中  | 現代思潮社   |       | 112 | 文京区小日向1-24-8         | 943-4406          |
|      | 社会思想社   | 渡辺 和彦 | 113 | 文京区本郷1-25-21         | 813-8105          |
| 幹事   | 春秋社     | 神田 治  | 101 | 千代田区外神田2-18-6        | 255-9611          |
| 幹事   | 晶文社     | 萬洲 隆男 | 101 | 千代田区外神田2-1-12        | 255-4502          |
| 幹事   | 誠信書房    | 浜地 正憲 | 112 | 文京区大塚3-20-6          | 946-5666          |
|      | 筑摩書房    | 菊池 明郎 | 101 | 千代田区神田小川町2-8         | 291-7651          |
|      | 東海大学出版会 | 岡田栄三郎 | 160 | 新宿区新宿3-27-4<br>東海ビル  | 356-1541          |
|      | 東京創元社   | 長谷川 裕 | 162 | 新宿区新小川町1-5           | 268-8231          |
| 会長   | 東京大学出版会 | 中平千三郎 | 113 | 文京区本郷7-3-1           | 812-2111<br>内7955 |
|      | 〃       | 竹内 康一 | 〃   | 〃                    | 811-8814          |
| 幹事   | 日本評論社   | 後藤 光行 | 160 | 新宿区須賀町14             | 341-6161          |
| 休会中  | 福村出版    |       | 112 | 文京区小石川1-3-17         | 813-3981          |
|      | 平凡社     | 鈴木喜久三 | 102 | 千代田区三番町5 Kビル         | 265-0455          |
| 幹事   | 法政大学出版局 | 市川 昭夫 | 106 | 港区南麻布2-8-4           | 453-0717          |
| 代表幹事 | みずず書房   | 相田 良雄 | 113 | 文京区本郷5-32-21         | 814-0131          |
|      | 未来社     | 藤森 建二 | 112 | 文京区小石川3-7-2          | 814-5521          |
|      | 雄山閣出版   | 武 一雄  | 102 | 千代田区富士見2-6-9         | 262-3231          |
|      | 有斐閣     | 佐藤 進  | 101 | 千代田区神田神保町2-17        | 265-6811          |
|      | 吉川弘文館   | 川越 重行 | 113 | 文京区本郷7-2-8           | 813-9151          |

販売委員会 ◎浜地 氏家 佐久間 岡田 武

弘報委員会 ◎神田 原田 和田 渡辺 鈴木 佐藤

調査・企画委員会 ◎萬洲 竹内 菊池 長谷川 藤森 川越

◎印は委員長

# 芸術の記号論

加藤茂・谷川渥・持田公子・中川邦彦 絵画、詩的言語、映画を解説する。芸術記号論への手引き。 二〇〇〇円 千 300

# 舞踊のコスモロジー

市川 雅へ身体と宇宙などの原型的な考察からへ様式と象徴の問題までトータルにとらえる。 二〇〇〇円 千 250

# 三浦つとむ選集

全5巻 内容見本呈

① スターリン批判の時代 2400

② レーニン批判の時代 3200

③ 言語過程説の展開 4600

④ 芸術論 3800

⑤ ものの見方考え方 2400

A 5 送料各三〇〇円 郵送料各三〇〇円 上製二四〇〇頁 六四〇頁

東京文京 後楽2-23

勁草書房

振替東京 5-175253

# アーサー王伝説

R・キャヴェンディッシュ 高市順一郎訳  
冒険と激情と名誉と死と——。騎士物語の源流にして、その最高峰をなす、アーサー王伝説の魅力のすべてをあきらかにする。1800円

# ゴルドーニ劇場

C・ゴルドーニ 田之倉稔編訳 18世紀イタリアの喜劇王ゴルドーニの世界を、ふたごをテーマにした二篇の傑作戯曲と、訳者による力作解説によって鮮やかに甦らせる。 2800円

# 仕事 WORKING

S・ターケル 中山容他訳 新聞配達からスポーツ選手まで、115職種113人の実在の人々がそれぞれの言葉で、自分の仕事と生き方を語る壮大な聞き書き集。各紙誌絶賛！ 3800円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12 電話 (255) 4501

# 誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

# 記号論と主体の思想

R・カワード他／磯谷 孝訳 構造主義・記号論など現代思想の最先鋭とマルクス主義、精神分析の出会いの中で、記号と主体の成立の関係を追求し、新しい展望を開く。 三〇〇〇円

A・ルメール／長岡興樹訳 著者は、フロイトと言語学への復帰を説くラカン思想を、パトスとロゴスの、またパロールとラングの乗離の分析を通して捉えんとする。 四八〇〇円

# ジャック・ラカン入門

# 食文化シリーズ -6巻

文化としての〈食〉をとおして日本及び日本人を徹底的に掘り下げ、豊潤さの陰でマニエリスムに陥りつつある〈現代の食〉に、新視座を提供。定価平均1600円●内容案内呈

# 食

大谷光瑞著 薄井恭一編訳

宗教界の巨人・大谷光瑞が残した食の世界の“聖書”の現代語訳版。東西家庭料理を網羅。1600円

# 1 美味求真

薄井恭一著 政治家にして食通、美食味道の傑作・木下謙次郎の『美味求真』を現代の眼で抄訳。千1600円

- ③ 和食革命……………永山久夫
- ④ 絵で見る日本食物史…小柳輝一
- ⑤ マタギ食伝……………村井米子
- ⑥ 日本人と西洋食文化…村岡 賢

続刊

# 春秋社

東京・外神田2-18-6 電話(03)255-9611 千101

# 現代社会科学叢書

既刊41冊 四六判並製

新刊

## 林竹二著作集 全10巻

著者自身の校閲・編集によって成る、待望の著作集。  
●第1回好評発売中 ●運命としての学校 1600円

緊急書下し提言！へ文部行政断罪の書

## 教育亡国 林竹二

学校は子どもにとってばかりでなく、教師にとっても恐怖のマトとなってしまった。真にその責任を問われねばならないのは誰か、痛恨こめて訴える。 1100円

## 生涯教育

抑圧と解放の弁証法

ジェルビ 前平泰志訳 一五〇〇円

## 集合行動論

ペリー&ビュー

三上俊治訳 一五〇〇円

## 大衆文化の神話

スウィングウッド

稲増龍夫訳 一三〇〇円

## 脱学校の社会

イリッチ

東洋、小澤周三訳 一〇〇〇円

## 脱学校化の可能性

イリッチ他 松崎 巖訳 一〇〇〇円

## 文化人類学入門

リントン 清水、大森訳 一〇〇〇円

## 男性と女性

ミード 田中壽美子訳 上 一五〇〇円  
加藤 秀俊 下 一〇〇〇円

東京創元社 162 東京都新宿区新小川町

刊行開始!

筑摩書房

東京神田 小川町2

## 近代日本の政治文化と 言語象徴

石田 雄著

こころを通して日本文化の特質をさぐる。 定価二八〇〇円

## 憑霊とシャーマン

現代を生きる人びとのための知的で、霊的な、エッセー集。ひよつぱい。

佐々木宏幹著 — 宗教人類学ノート — 日本各地、アジア諸地域の数多くの具体的な事例研究を通して、われわれの身近かな存在としての憑霊とシャーマンについて解明した興味あふれるエッセー集。 四六判 定価二六〇〇円

東京大学出版会

113 文京区本郷東大構内 ☎03-811-8814

東海大学出版会

## ラテンアメリカ文学のブーム

作家の履歴書 [東海選書] 定価1800円  
ドノソ著 内田吉彦訳 鼓 直解説『夜のみだらな鳥』の著者の自伝的エッセイ。

## コミュニティの理論と政策

磯村英一編 定価1800円  
『日本的コミュニティ』のあり方を模索。

## ASTRAEA 星の処女神とガリアのヘラクレス

エイツ著 西澤・正木訳 定価3000円  
東京都新宿区新宿3-27-4電話(03)356-1541

文・室田武／写真・河野裕昭

# 水車の四季

カラー150点・白黒60点・定価2300円

水車は紀元前四―一世紀ごろ、西アジアのどこかで回りはじめ、石油文明の支配する現代でも世界各地に生き続け、この文明に衰退の兆が目立つようになった今日、再興の息吹きを示しはじめている。本書は日本で稼働中のさまざまな水車を写真と文章で紹介するものである。

〒160東京都新宿区須賀町14



日本評論社

## 法政大学出版局

■法政大学大原社会問題研究所編／日本社会運動史料・機関紙誌篇  
**我等／批判 全51巻** 各巻A5判上製 詳細内容見本室

■全巻揃定価148万円(各期毎九万五千円)  
■全巻揃予約特価112万円(各期毎八万九千円)  
■全巻一括前払特価139万五千円  
■申込締切 昭和58年12月31日  
■発行予定 昭和58年3月31日  
■分売は致しません  
■第1期 我等1 1010 昭和58年3月  
■第2期 我等2 1111 昭和58年3月  
■第3期 我等3 1212 昭和58年3月  
■第4期 我等4 1313 昭和58年3月  
■第5期 我等5 1414 昭和58年3月  
■第6期 我等6 1515 昭和58年3月

森嘉兵衛著作集・第四巻

**奥羽農業経営論**

奥羽農業の苦難の歴史を照射  
第6回配本／定価八八〇〇円  
■予約者特別定価八三〇〇円

「道」 刊行委員会編  
道 安井郁生の軌跡

平和の論理を追求し続けた七  
三年の生涯を偲ぶせる遺稿と  
追憶を集成。定価二〇〇〇円

東京都港区南麻布2-8／振替東京6-95814

# ルネサンス精神史

S・ドレスデン

訳・解説 高田勇

●定価1,800円

フィレンツェを中心とした古典古代の復活、エラスムスの著作、ラブレールに代表されるフランス文学、モンテーニュの作品、宗教改革運動などに史実と思想の内側から迫る。合理と非合理が渾然とした時代精神であるユマニスムを、ルネサンスの世界に追求し、新しい視点を提出する。

東京都千代田区三番町

平凡社

## 井村恒郎・人と学問

著者の遺文と、懸田克躬・松田道雄・松村龍雄・轟弘・土居健郎ら十九氏の追憶と思い出を取める。著作集別巻。三〇〇〇円

## フロイトにささぐ

H・D・フロイトとその分析技法を、詩人自身の患病体験から描いた驚くべきドキュメント。鈴木重吉訳。三〇〇〇円

## ウエーバーとトレルチ

宗教と支配に  
関する試論  
柳文園近 新しい社会を生み出す思想や人間類型は、いかにして形成されるか。「宗教と支配」の視点より探究。三〇〇〇円

## 紀行と閑談

朝水振一郎著作集(12) 第12回配本  
海外旅行での見聞をまとめた紀行談5篇と、くつろいだ暮らし  
気のかなでの機知に富む座談6篇。松井巻之助解説。三〇〇〇円

東京文京本郷  
3丁目17-15

みすず書房

第二卷 第二回配本

社会の起源

三木哲学からの離反

# 梯明秀経済哲学著作集 前期五巻

第一巻 総括的序論・物質の哲学的概念 五〇〇〇円

第二巻 資本論の弁証法的根拠

第四巻 社会科学のための諸問題

第五巻 西田・田辺両哲学と私の立場

マルクス主義の立場から、その独自の哲学的立場「全自然史的過程の思想」を構築した梯明秀教授の著作を集大成する ●A5判上製函入・二九四頁・四八〇〇円

推せん者 内田義彦・杉原四郎  
鈴木享・武谷三男・野間宏  
各巻月報挿入(星・内容見本)

東京文京区小石川三の七  
振替東京七七八七三八五  
電話 814・5521

未来社

## 有斐閣選書

### 情報社会をみる眼

新 陸人著 ■コンピュータ革命のゆくえ ■身近な例から情報社会をみる眼を提  
供し、情報社会を展望する。 17000円

### 日常社会の虚と実

石川 実ほか著 ■アイロニーの社会学 ■人間社会の成り立ちがいかに皮肉に満ち満ちているかを説き明かす。 16000円

### 文化記号論への招待

池上嘉彦ほか著

13000円

有斐閣/東京神田神保町2-17

動乱の世紀を探る—多彩な業績を集大成

## 戦国大名論集

永原慶二監修

全18巻/刊行中

■既刊

- ① 戦国大名の研究 永原慶二編
- ③ 東国大名の研究 佐藤博信編
- ④ 中部大名の研究 勝俣鎮夫編
- ⑧ 後北条氏の研究 佐脇栄智編
- ⑫ 徳川氏の研究 小和田哲男編

- 7月より毎月一冊ずつ刊行中
- A5判・上製・函入/平均470頁
- 定価=各巻5900円(分売自由)
- 詳しくは「内容見本」をご請求下さい

吉川弘文館

東京都文京区本郷7丁目2番8号

非売品

歴史のなかの秘められた民衆文化を掘り起こす!

## 生活文化史 第一号

特集 日本の家—日本人のこころ

日本生活文化史学会編集 B5判 一、五〇〇円

第一号 特集

○日本人と家屋の特徴(西 和夫) / ○日本人の住居観(芳賀 登) / ○明治大正の人々とヨーロッパ化する住宅(小野一成) / ○障子と明りのかかり(平井 聖) / ○生活様式と玄関(内田青蔵) / ○押入と寝所(後藤久太郎) / ◎住居と社会のかかり / ほか

千代田区富士見2-6-9 振替東京3-1685

雄山閣出版

|      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| 回覧者印 | 回覧者印 | 回覧者印 | 回覧者印 | 回覧者印 |
|      |      |      |      |      |

昭和58年10月15日発行 年4回発行 第39号  
発行所 人文会 みすず書房内  
〒113 東京都文京区本郷5-32-21  
(113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)